海蔵寺だより

第23号
令和4年3月
発行

令和4年3月、例年以上に多い積雪を乗り越えた海蔵寺に、今年も春彼岸の時期がやってまいりました。今回はその「お彼岸」について、少しだけ深めたいと思います。

「彼岸（ひがん）」 ―― お釈迦様の居る場所へ

突然ですが、仏教で一番知られているお経というと、殆どの方は般若心経を思い浮かべると思います。

この般若心経の正式名称は「般若波羅蜜多心経」といいますが、ここに含まれる「波羅蜜」という言葉と、「彼岸」が、実は同じ意味を持っています。「波羅蜜」は大本のインドの言葉「パーラミッタ」の発音から来ており、それを意味で訳した結果、「彼岸」という言葉になったという事です。

仏教では古来から、煩悩が吹き荒れる迷いの状態である「此（こ）ちら側」を「此岸（しがん）」、逆に煩悩から脱した悟りの境地を「彼岸」とする考えがあります。亡くなったご先祖様たちは供養・葬送されることによって、生まれ変わりの輪廻の世界（此岸）から解放されて、この彼岸に至るんですね。

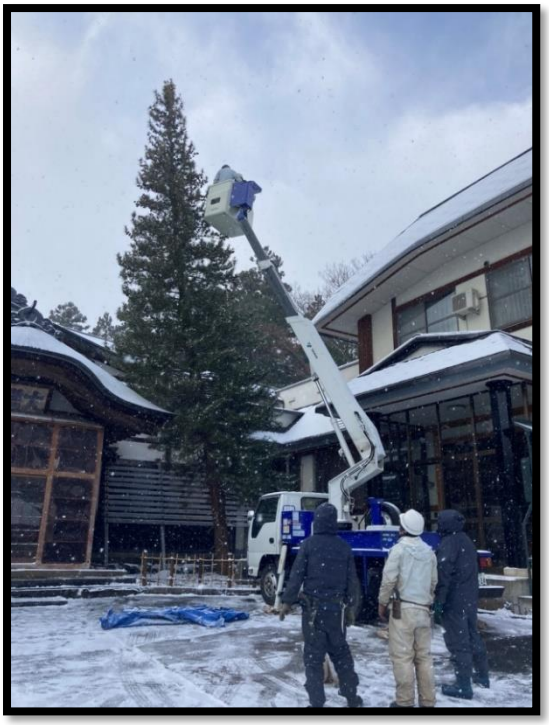
そして、その彼岸に至るまでの修行過程も、やがては彼岸と呼ばれるようになりました。

六波羅蜜（ろくはらみつ）という言葉は聞いたことがあるでしょうか。波羅蜜は彼岸と同じ意味です。布施（ふせ）、持戒（じかい）、忍辱（にんにく）、精進（しょうじん）、禅定（ぜんじょう）、智慧（ちえ）と、悟りへ至るための6つの修行法の事を言います。この智慧は、別の言葉で「般若」と言ったりします。般若波羅蜜多心経は、この智慧波羅蜜について説いたお経だったんですね。

さて、ここまでお釈迦さまの時代の話をしてきましたが、お彼岸という習慣、お墓参りをする習慣は、実はインドではなく日本で生まれた行事なんです。記録に残る最古のお彼岸の記録は、806 年に行われた、崇道（すどう）天皇（早良（さわら）親王）の鎮魂のために行われた仏事です。鎮魂のための仏事だったため、やがてお墓参りの習慣に代わっていったそうです。

雪の多い弘前で春彼岸にお墓参りすることは中々叶（かな）いませんが、コロナで外出や対面が極端に少なくなった最近、一度お寺の位牌堂にて、先祖供養のために家族で顔を合わせるのもよいのではないでしょうか。

本堂玄関よこにあった結婚記念植樹のコウヤマキが、伐採されました。



去年より少しずつ傾いてきておりました、正面玄関横のコウヤマキが、倒れる危険があるとの指摘を業者より受け、程なくして伐採するに至りました。

このコウヤマキは平成 3 年に現住職の結婚記念植樹として当時の檀家さん一同より寄贈されたもので、昨年の 12 月 13 日、遂に 31 年の生涯を終えました。

また、コウヤマキの枝の一部が跡地に挿し木として植えられ、現在は雪囲いの中で息を潜めております。しっかりと育つ可能性はあまり高くないそうですが、今後の成育が注目されるところです…。

お寺特集：灰作務

連載になる予定はまだございませんが、海蔵寺だよりにて時折、お寺の境内やその生活について特集していきたいと思います。

お寺の基本的な作務の一つである灰作務（はいざむ）。香炉の灰の中に溜まった線香の燃え残りを、ザルや箸で回収していきます。

回収後は香炉の底を床に打ち付けて、平らに整えます。また、専用の器具を使って、より精密に平らめる場合もあります。

僧堂に安居（あんご）（修行に入ること）してまず教えられるのが、境内の掃除やこの灰作務です。しかし、基本とはいっても奥が深く、専用器具（灰均し）で香炉の灰を平らにする技術は精密そのもの。ミリ単位以下でシワを直していく過程は、非常に根気がいります。

修行中に本山などでそういった仕事をする部署に就いていた方には時折、この灰ならしの技術を極限まで磨き切った方がいるのです。

編集後記

今回も海蔵寺だよりを制作しております、徒弟の長男・滉基です。

昨今はインターネットによる発信がすっかり主流になったことを踏まえ、ひとつ海蔵寺のウェブサイトを作ってみようという事で、開設に向けて鋭意製作中でございます。

しかし、制作中というよりは勉強中というような状況で、オープンにはまだ時間がかかりそうです。ウェブサイトの制作に使う言語はとても奥が深く、挫折と立ち直りを繰り返しながらの匍匐前進（ほふくぜんしん）。友人にこれが基本中の基本と言われたときは、耳を疑いました。

もうすぐ春ですね。　　合掌